

日本宋代文学学会 第五回大会

—プログラム—

- 日時： 2018年 5月26日(土) 8:30開場 9:00開始
- 会場： 慶應義塾大学日吉キャンパス
来往舎 1階 シンポジウムスペース (p.3地図参照)
- 参加費： 1,000円

午前の部 9:00~11:40

8:30 開場／受付開始

9:00 主催校あいさつ 慶應義塾大学 種村 和史
会長開会あいさつ 大阪大学 浅見 洋二

(I) 9:10~9:40 : 対句表現に見る慶暦期後半の梅堯臣詩について

広島大学大学院 大井 さき

(II) 9:40~10:10 : 西尾市岩瀬文庫蔵 五山版『山谷詩集注』における
書き入れについて —黄山谷詩漢文抄との関わりから—

名古屋大学博士候補研究員 大島 絵莉香

(III) 10:10~10:40 : 南宋詞における「汴京」をめぐって

大阪大学外国人招聘研究員 余 佳韻

(IV) 10:40~11:10 : 甲子與節序：論遺民詞人劉辰翁入元後的心境轉折

立命館大学アジア日本研究機構専門研究員 余 筠珺

(V) 11:10~11:40 : 論辛棄疾詞的現實空間敘述

武漢大学 汪 超

—昼休み(11:40~13:00)—

- ・理事会 11:50~12:15 (来往舎F2 小会議室)
- ・評議員会 12:15~12:45 (来往舎F2 小会議室)

午後の部 13:00~18:00

(VI) 13:00~13:30 : 『楽府雅詞』拾遺初探

岡山大学 藤原 祐子

(VII) 13:30～14:00 : 喬大壯手批《清真詞》析論

国立中央大学 卓 清 芬

——休憩(14:00～14:15)——

(VIII) 14:15～15:45 : シンポジウム (I)

共催 九大QRプログラム「第2回東アジア交流と文学」国際シンポジウム

〈第一部〉

詞学研究の現状と展望

司会: 早稲田大学 内山 精也

パネラー	日本	日本大学 保 莉 佳昭
	中国	武漢大学 譚 新 紅
	台湾	国立中央大学 卓 清 芬

——休憩(15:45～16:00)——

(IX) 16:00～17:15 : シンポジウム (II)

九大QRプログラム「第2回東アジア交流と文学」国際シンポジウム〈第二部〉

共催 日本宋代文学学会、JSPS基盤研究(B)「唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究」

唐宋八大家の諸相

— 歐陽脩と王安石 —

司会: 同志社大学 副島 一郎

1 歐陽脩の詞集・吉州本『近体楽府』について

九州大学 東 英寿

2 “修廟” 與 “立學” : 北宋學記類文章的一個話題

——從王安石《繁昌縣學記》入手

復旦大学 朱 剛

■ 総合討論 ■ 17:00～17:15

——休憩(17:15～17:30)——

■ 総会 17:30～18:00

- 会費 5,000円
- 会場 来往舎F1 ファカルティクラブ（立食形式）

詳しくは下の地図と説明をご覧ください。

■ 大会会場 (慶應義塾大学日吉キャンパス) ■



アクセス方法

東京駅からお越しの場合は、JR山手線外回りに乗り換え、「目黒」もしくは「渋谷」で下車し、東急目黒線もしくは東急東横線に乗り換えてください。「目黒」の方が乗り換えは便利です。

横浜駅からお越しの場合は、東急東横線に乗り換えてください。日吉に特急は停車いたしませんので、ご注意ください。

日吉に到着後は、改札口を出た後、右に進み、信号を渡ると、慶應義塾の日吉キャンパスです。銀杏並木を直進し、左図の⑨が会場の「来往舎」です。

☆ 昼食については、各自ご持参いただくか、大学内の食堂・生協売店をご利用ください。



準備の都合上、**5月18日(金)までに、「大会・懇親会」の出欠をメールでお返事くださいますようお願いいたします。**皆様のご参加をお待ちしています。

大会幹事 高橋 幸吉
koukichi@yd5.so-net.ne.jp

— 発 表 要 旨 —

【午前の部】

I. 対句表現に見る慶暦期後半の梅堯臣詩について

広島大学大学院 大井 さき

梅堯臣の対句表現は、仁宗の慶暦年間（1041—1048）後半になると、それ以前との違いがはっきり分かるほど変化する。それは、対応する位置関係にある語が明確な対応関係をもたなかったり、熟語として定着していない文字の組み合わせが用いられたりする点に現れる。常套表現を避けようとする傾向が強くなるのである。

慶暦期後半には他にも、日常生活のありふれた事物を好んでうたうようになるという変化が認められる。そうした事物が伝統的にあまり詠じられてこなかったことは、先行する諸論が指摘する所である。従来にない新たな表現を行うようになる点で、この二つの変化は関連する。この時期は、梅堯臣の詩が後代の詩の先駆けとなるような特徴を形成していく過程において、特別な意味をもつのではないだろうか。

II. 西尾市岩瀬文庫蔵五山版『山谷詩集注』における書き入れについて — 黄山谷詩漢文抄との関わりから —

名古屋大学博士候補研究員 大島 絵莉香

本邦五山における黄庭堅(以下、山谷と称す)詩の主たる漢文抄には、万里集九(1428~?)『帳中香』、月舟寿桂(1470?~1533)『山谷幻雲抄』、彭叔守仙(1490~1555)『山谷詩集注』の計三本があり、これらは幸運にも揃って現存している。しかし、これら山谷詩漢文抄の成立以前の、五山僧の説の継承関係を議論することは困難であるため、調査対象を山谷詩漢文抄に限らず、五山版『山谷詩集注』の書入れにまで広げたい。本発表でとりあげる西尾市岩瀬文庫蔵五山版『山谷詩集注』(以下、岩瀬本と略す)の書入れには、現存する最古の山谷詩漢文抄である『帳中香』の抄者、万里以前の五山僧の説のみが確認できる。したがって、岩瀬本の書入れは、山谷詩漢文抄が成立する以前の、準抄物とみなすことができる。

本発表では、岩瀬本の書入れにある五山僧の説が、いずれの山谷詩漢文抄の説と一致するのか、有用な説をとりあげながら論じたい。

III. 南宋詞における「汴京」をめぐって

大阪大学外国人招聘研究員 余 佳 韻

宋代の筆記では、「汴京」に関する様々な風習や行事をすでに記録され、貴重な参考資

料を残されたが、詞という抒情的なジャンルとは異なる表現が幾つも見られる。本稿では、南宋の城市景観に対する関心を持って、まず南宋詞の「汴京」に関する作品を中心に分類し、其々の趣旨を考察する。また、南宋の詞人が典拠や節序を当時の政治状況と隠喩するのを分析し、昔の「汴京」の生活や都会の繁栄をよみがえる一方、時の流れへの緊張感と南宋朝廷への不安感も一層に現れることを指摘する。よって、「汴京」という主題とした作品を南宋詞に位置付けられる上、詞というジャンルの独特な抒情表現が窺えることを提示する。

IV. 甲子與節序：論遺民詞人劉辰翁入元後的心境轉折

立命館大学アジア日本研究機構専門研究員 余 筠 琚

劉辰翁(1232-1297)の有序詞可分四類：唱和、祝壽、詠花、節序。乙亥(1275)丁家洲兵敗，劉辰翁開始以甲子紀年來表達自己遺民的立場，且多記於節序之際，20年間留存12年共25首甲子節序詞。本文將從歷年「甲子」的時間序列，結合各種政治社會事件，鋪陳劉辰翁入元後的心境轉折。同時分析劉辰翁節序詞的內涵，如同一年的各種節序表現、同一節序前後數年的寫作關懷，解釋劉辰翁的甲子紀年為什麼多在節慶之時，呈現宋元易代前後，「節序」之於劉辰翁、之於遺民的意義轉變。

V. 論辛棄疾詞的現實空間敘述

武漢大学 汪 超

作家对其生活空间的叙述必然体现其观念、心态，并进一步影响他的创作。辛弃疾的信州空间叙述始终隐藏着他的出处焦虑。从早年“带湖买得新风月”、“买得青山好”等句，到晚年福州任上思归诸作，反映他的信州地方认同转变。但与本土作家对信州灵山、信水地名的运用差异，表明稼轩融入地方时，仍然保有“他者”的立场。而在定义空间属性时，他强调带湖的“城外”位置，与瓢泉的“山中”特点，则影响到他对相关词作意象、典故的择用。他的词还采取了将回忆空间与实时空间并置叙述的处理方式。凡此，多与辛弃疾理想与现实的矛盾，奋进与倦怠的心态息息相关。

[午後の部]

VI. 『樂府雅詞』拾遺初探

岡山大学 藤原 祐子

曾慥が紹興十六年（1146）に編纂した『樂府雅詞』は、他書には見えない北宋から南宋初の詞人及びその作品を多く現代に伝えるという点において極めて重要な意義を持つ、

現存する宋人選宋詞の最初期の編著である。本発表では、まず多くの場合「無名氏の作」としてひとくくりにされ、個別に論じられることのない「拾遺」上下二巻を中心に、誰の作品がどのような順番で収録されるのか、その配列に意味を見いだすことが出来るのかという初歩的な考察を行う。また、下巻ですでに項目として挙がっている詞人でありながら、拾遺中にも無記名で作品が多数収録される向子諲について、曾慥との交流に着目しつつ、その作品の流伝の過程と様相を探っていく。最終的には、『樂府雅詞』全体がどのように作品を収録するのか、それらのテキストの来源となったものは何か、といった問題についても考えてみたい。

VII.

喬大壯手批《清真詞》析論

国立中央大学 卓 清 芬

喬大壯(1892-1948)名曾劬，四川華陽人。1947年渡海來臺，在臺大中文系任教。喬大壯手批周邦彥《片玉詞》中藉著周詞的評點闡釋了境界、起結、過片、對偶、比興等詞學觀念，承繼了晚清民國詞學的關注議題。對於晚清民國最為推崇的周邦彥詞，提出一己獨到的觀點。

* * *

VIII. シンポジウム (I)

共催 九州大学QRプログラム「第2回東アジア交流と文化」国際シンポジウム〈第一部〉

詞学研究の現状と展望

司会 早稲田大学 内山 精也

同じく「詞学」であっても、日本・中国・台湾の三国では、アプローチの仕方や研究の内実に、微妙な相異が存在します。今回の大会では、詞学関連の発表が5本と集中いたしました。この好機に、日本・中国・台湾を代表するお三方に、詞学研究の「今」を照らし出してもらおうと思います。あわせて今後の展望についても相互に意見を出し合ってください。フロアからも、どうぞ活発に質問・ご意見等をお寄せください。

パネラー

日本

日本大学 保 莉 佳 昭

中国

武漢大学 譚 新 紅

台湾

国立中央大学 卓 清 芬

IX. シンポジウム（Ⅱ）

九州大学QRプログラム「第2回東アジア交流と文化」国際シンポジウム〈第二部〉

共催 日本宋代文学学会、JSPS基盤研究(B)「唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究」

唐宋八大家の諸相 — 歐陽脩と王安石 —

司会 同志社大学 副島 一郎

散文の大家として知られている唐宋八大家。彼らは散文以外でも様々な分野で成果を残しており、本シンポジウムでは、歐陽脩の“詞”と王安石の“学記”に焦点を当てて、唐宋八大家の一側面に切り込んでいく。

1 歐陽脩の詞集・吉州本『近体楽府』について

九州大学 東 英寿

歐陽脩の詞集として、成立過程が明らかで最も信頼できる『近体楽府』3巻について、これまでの研究では慶元2年（1196）に歐陽脩の故郷・吉州で編纂された吉州本『近体楽府』（周必大編纂『歐陽文忠公集』収録）の存在が注目され、そこには歐陽脩の詞194首が収録されているとみなされてきた。しかし、歐陽脩書簡96篇の発見の際に調査した版本の伝承過程に基づくと、先行の研究においては実際に吉州本『近体楽府』を確認していたのか、しかもそこには本当に194首収録されていたのかという疑問が生じる。本発表では、先行の研究は実際に吉州本『近体楽府』を見ていないこと、さらにそこには194首ではなく181首しか収録されていないことを明らかにしたい。

2 “修廟” 與 “立學”：北宋學記類文章的一個話題 ——從王安石《繁昌縣學記》入手

復旦大学 朱 剛

劉成國先生新出《王安石年譜長編》，繫《繁昌縣學記》於慶曆七年（1047），考為“現存公學記中最早一篇”。此文開篇即議論孔廟與學校的關係問題。這是因為當時州縣的學校，往往僅是孔廟的一個不常設的附屬部分，而北宋朝廷興辦學校的政策，事實上也以修葺孔廟為先導，故王安石初作“學記”，便首先要審辨“修廟”與“立學”的關係。廟事孔子，春秋釋奠，似乎被看做中華禮樂文明的核心節目之一，然而若依王安石的思路，在三代制度的意義上理解禮樂，則祭祀孔子當然不可能是周公“制禮作樂”的原始內容。雖然說祭孔非禮，似乎有點驚世駭俗的味道，但其非三代之制，則可無疑。相反，“自京師至於鄉邑”皆有學校，倒是經典明文記載的真正三代之制，而後世用以祭孔的釋奠之禮，原本是學校裡舉行的一種體現學問傳承意識的儀式，就算這種儀式以孔子為尊事的對象，那也應該是祭孔之儀附屬於學校，不應該是學校附屬於孔廟。所以王安石明確表示：“今也無有學，而徒廟事孔子，吾不知其說也。”在他看來，兩者的關係被弄顛倒了，是一種錯誤。

作為一篇“學記”，自須強調立學的意義，而且也不妨說立學遠比祭孔重要，但因此而

走到非議祭孔的地步，似乎並無必要。然而，王安石次年又作《慈溪縣學記》，不但以更大篇幅展開了這個話題，甚且把廟事孔子形容為“四方之學者，廢而為廟，以祀孔子於天下，斲木搏土，如浮屠、道士法，為王者象”，幾乎詆為異教了。可見他對待這件事的態度非常嚴厲，反映出他的思想與現實之間一個相當激烈的衝突點。王安石以這個衝突點為他撰作“學記”的起點，很值得我們關注。雖然其“學記”中更著名的一篇，也可以被看做宋代“學記”之代表作的，是將近二十年後所寫的《虔州學記》，但後者充分地展開其關於“學”的思想，全文不涉及“廟”，則前後聯繫來看，揚棄孔廟而建立學校，是他撰寫“學記”的總體思路。用他自己的話說，是“變時而之道”，孔廟是“時”而學校是“道”。這就包含了批判和建樹兩個方面，《虔州學記》全力建樹，之前的《繁昌縣學記》、《慈溪縣學記》則更多地展示出批判性。

那麼，以批判“修廟”為倡導“立學”之前提，是不是這位“拗相公”與眾不同的任性表現，或者說獨立主張呢？要回答這個問題，需要考察一下別人的同類文章是怎麼寫的。什麼是同類文章呢？首先當然是題名為“學記”的文章。事實上，學術界已經注意到“學記”是宋代古文的一個重要品種，近年已有不少研究成果，但為了考察“修廟”與“立學”的關係這一話題，除了題名為“學記”的文章外，我們還需要把有關孔廟的許多“記”或“碑”文也納入視野，而且實際上宋人也有稱為“廟學記”的文章，《全宋文》裡面可以找到十餘篇，如李堪《古田縣廟學記》，蔡襄《福州修廟學記》、《亳州永城縣廟學記》等，同時記敘“廟”與“學”的興建。多年以前，就因為注意到這些“廟學記”，筆者曾把宋代“學記”文類的淵源推至前人的孔子“廟碑”或“廟記”，然後經過“廟學記”這一過渡形態，發展出“學記”。這個推想忽視了宋代以前題為“學記”的文章已經存在的事實，劉成國先生在《宋代學記研究》中亦已加以糾正。然而，由於“廟”與“學”的糾纏在現實中也確實存在，故宋人所撰廟碑、廟記、廟學記、學記等，對此多有回應，在這個意義上，筆者以為仍可將它們視為同類文章，加以考察。對於宋人來說，廟事孔子，而以學校附焉，是從前代延續下來的現實，對此現實的質疑是逐漸產生的，本文旨在梳理這個產生的過程，從而將王安石的批判置入歷史語境，加以考察。